

# 生徒指導・教育相談と 特別支援教育をつなぐもの

文教大学教育学部 准教授 会沢信彦

私は、生徒指導や教育相談全般を研究テーマとしており、発達障害や特別支援教育については必ずしも詳しいわけではありません。しかし、後述するように、発達障害の支援や特別支援教育は、従来の生徒指導・教育相談と無縁ではありません。そこで本稿では、生徒指導・教育相談の立場から、今の子どもたちや学校の抱える課題を考えるとともに、生徒指導・教育相談と特別支援教育の接点についても考察してみたいと思います。

## 最近の生徒指導・教育相談の3大課題

読者の皆さんが、「生徒指導」「教育相談」という思い浮かぶ課題は何でしょうか。いじめ、不登校、非行は、今も昔も生徒指導や教育相談の大きな課題です。私は、それ以外に、ここ数年の間にクローズアップされてきた、多くの教師を悩ます3つの課題があると考えています。

### ●保護者対応の難しさ

1つは、生徒指導や教育相談の範疇を外れるかもしれませんが、対応が困難な保護者の増加です。

「モンスター・ペアレント（ペアレンツ）」なる言葉が流行語のように世間を賑わせ、テレビドラマのタイトルにまでなった（2008年）のは、ほんの最近のことです。私の印象では、このテーマに関する書籍や雑誌の特集が増え、また教員研修のテーマとしても盛んに取り上げられるようになったのは、ここ5、6年というところではないかと思います。この問題を早くから取り上げ、「イチャモン（無理難題要求）」と呼んでその重要性を喚起した小野田正利氏（大阪大学大学院教授）は、学校関係者への調査を通して、保護者から学校に対する無理難題要求が増えてきたと実感する教職員は8割近くに及ぶことを明らかにしています（小野田正利編著『イチャモン研究会』ミネルヴァ書房、2009年）。

その原因や背景についてはここでは触れませんが、ここ数年の間に、保護者対応の難しさが多くの教師に共通するテーマとなってきたことは間違いないように思われます。

### ●ネット・ケータイ問題

一方、子どもたちに目を転ずると、やはりここ数年の間に大きくクローズアップされてきたテーマがあることが分かります。それは、ネットいじめ、学校裏サイトなどの、携帯電話やインターネットをめぐる問題です。

この問題に関しては、文部科学省も本格的な対策に乗り出しています。2007年9月には、いわゆるネットいじめ問題を検討するために、「子どもを守り育てる体制づくりのための有識者会議」が再開され、2008年6月には、『ネット上のいじめ』から子どもたちを守るために一見直そう！ケータイ・ネットの利用のあり方を一」と題する第2次とりまとめが発表されました。それを受け、同年11月には、『ネット上のいじめ』に関する対応マニュアル・事例集（学校・教員向け）が公表されています。一方、携帯電話問題については、2008年7月には「児童生徒が利用する携帯電話等をめぐる問題への取組の徹底について」、2009年1月には「学校における携帯電話の取扱い等について」として、

相次いで初等中等教育局長名での通知が出されています。特に後者については、小・中学校においては、「学校への児童生徒の携帯電話の持込みについては、原則禁止とすべきである」



と明確に打ち出したことから、マスコミにも大きく取り上げられました。さらに、学校裏サイトに関しては、2008年3月に、「青少年が利用する学校非公式サイトに関する調査報告書」が発表されています。

これらの問題に関して、文部科学省がここ数年いかに大きな関心を寄せているのかが伺えます。その背景には、この問題が子どもたちの間で急速に深刻化しているという事実がありそうです。

### ●発達障害の増加

神奈川県LD協会の関係者であれば、発達障害への支援が現在の学校教育における喫緊の課題であることは言を俟たないでしょう。そして、発達障害に関しては、私よりもむしろ読者の皆さんの方がお詳しいのではないかとも思うくらいです。なぜ敢えて、発達障害の専門家ではない私が、当たり前ともいえるこの問題を取り上げるのか。それは、少しだけ先生方の視点を広げていただきたいと願うからです。

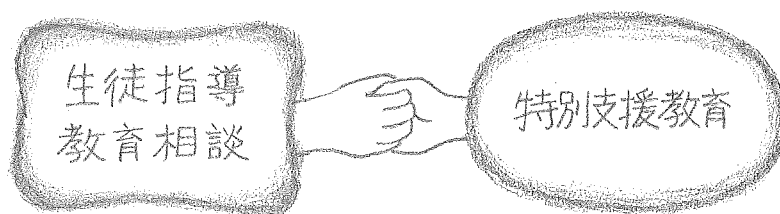
ここで質問です。「発達障害の支援といえば……？」連想する言葉をお答えください。おそらく、多くの方が「特別支援教育」とお答えになったことでしょう。言うまでもなく、特別支援教育の中心テーマは発達障害のある子どもへの理解と支援に置かれているからです。では、「発達障害の支援」と聞いて「生徒指導」「教育相談」という言葉を思い浮かべた方はどのくらいおられるでしょうか。おそらくそれほど多くはないのではないかと思います。

一方、「非行の指導」と聞いたら大部分の方が「生徒

指導」とお答えになるでしょうし、「不登校への対応」では「教育相談」と答える方がほとんどでしょう。しかし、読者の皆さんであればよくご存じのように、ADHDのお子さんが厳しい叱責を受け続けることで教師との関係を悪化させて反社会的行動を引き起こしたり、アスペルガー症候群のお子さんが友だち関係につまずいて不登校になったりするのは、決して珍しい事例ではないはずです。つまり、従来であれば生徒指導や教育相談の対象とされていた子どもたちの問題行動の背後に、発達障害が疑われることが少なくないことが明らかとなってきているのです。

とすると、発達障害のある子への支援はひとり特別支援教育だけの課題ではなく、実は生徒指導や教育相談の課題でもあるのです。おそらく、発達障害などの援助ニーズの高い子どもに対する支援システムが構築されている学校では、特別支援教育、生徒指導、教育相談がしっかりタッグを組むことで充実した支援が行われているものと推測されます。しかし、そうではない学校も少なくないように見受けられます。つまり、特別支援教育、生徒指導、教育相談がそれぞればらばらに動いている（あるいは、そもそも動いていない）ような学校です。

特別支援教育の理念や具体的な技法の中には、従来から生徒指導や教育相談の分野で培われてきたものが決して少なくありません。特別支援教育は生徒指導や教育相談から学び、生徒指導や教育相談は特別支援教育と手を携えることで、子どもたちへのより良い支援を提供することが可能になるのです。



## 3大課題の共通点は？

最近の生徒指導・教育相談の3大課題として、①保護者対応の難しさ、②ネット・ケータイ問題、③発達障害の増加、を指摘しました。では、これらに共通するテーマとは何でしょうか。私はズバリ、コミュニケーションだと考えています。

保護者対応が難しいとは、まさに教師と保護者とのコミュニケーションがうまくいかないということです。前述の小野田正利氏は、親を「モンスター」呼ばわり

することを強く戒めています（小野田正利『親はモンスターじゃない！』学事出版、2008年）。理不尽な要求をする親の中には、ゆがんだものの見方をしたり、あるいは背後にパーソナリティーの問題を抱えた人があるのも事実です。しかし、だからといって「モンスター」として切り捨てていいというわけではありません。むしろ、そのような課題を抱えた保護者だからこそ、我々は相手に敬意を払いつつ、丁寧なコミュニ

ケーションを心がける必要があるのだと思います。

インターネットや携帯電話は、今や私たちの生活に欠かせないコミュニケーション・ツールとなりました。したがって、ネット・ケータイ問題も、言うまでもなくコミュニケーションの問題です。では、この問題の背景にあるのは何なのでしょう。もちろん、これらのツールについての無知も原因の一つではあり、「情報モラル教育」が必要なことは確かです。しかし、私は、子どもたちがリアルなコミュニケーションに満たされていないことが真の原因ではないかと考えています。端的に言えば、現実の世界に気持ちをわかり合える仲間や、困ったときに相談できる相手が存在すれば、何も学校裏サイトに悪口陰口を書き込んだりはしないだろうと思うのです。

さて、発達障害については、その原因は「中枢神経系の機能不全」であるとされており、一見するとコミュニケーションとは無関係のようにも思われます。しかし、いじめ・いじめられ、不登校、非行などの二次障害は、すべて人間関係が基となって発生します。つまり、やはりコミュニケーションの問題です。

実は、発達障害の有無に関わらず、生徒指導・教育相談で扱われる問題は、すべてコミュニケーションの問題であるといえるように思われます。したがって、生徒指導・教育相談の最も重要な課題は、子どもたちのコミュニケーションの改善、そしてそれを促すコミュニケーションの教育にこそ存すると考えられるのです。

## 援助的コミュニケーションとしての教育相談

特別支援教育に携わる現場の先生方の話を伺ったり、著書を拝読したりすると、「な～るほど」と感心させられることがしばしばです。特別支援教育がいかにコミュニケーションに注意を払い、先生方がいかに一人ひとりの子どもに応じたさまざまなツールを開発されてきたかを知るにつけ、私自身が特別支援教育から学びたいという気持ちがふつふつと高まるのを感じます（たとえば、阿部利彦著『クラスで気になる子のサツとツール&ふわっとサポート 333』ほんの森出版、2009年には、何と333ものツールが紹介されています）。

一方で、やはりコミュニケーションに大きな関心を払ってきたのが、教育相談です。教育相談の中心となるカウンセリングについて、我が国における教育カウンセリングの第一人者である國分康孝氏は「言語的および非言語的コミュニケーションを通して、行動の変容を試みる人間関係」と定義しています（國分康孝『カウンセリングの技法』誠信書房、1979年）。一方、コミュニケーションの改善を図る技法として特別支援教育においてしばしば用いられるソーシャルスキルトレーニング（ソーシャルスキル教育）は、ご存じの通り学級集団を対象とした開発的教育相談（育てるカウンセリング）の技法としても大きな注目を集めています。

ところで、カウンセリングでは、従来から「受容」「共感」の重要性が指摘されてきましたが、長らく教育相談に携わってこられた先生方とお会いすると、本当にこれらの態度が存在そのものとなっているような方にお目にかかることがあります。そのような方とお話しさせていただくと、なぜかとても居心地が良く、安心

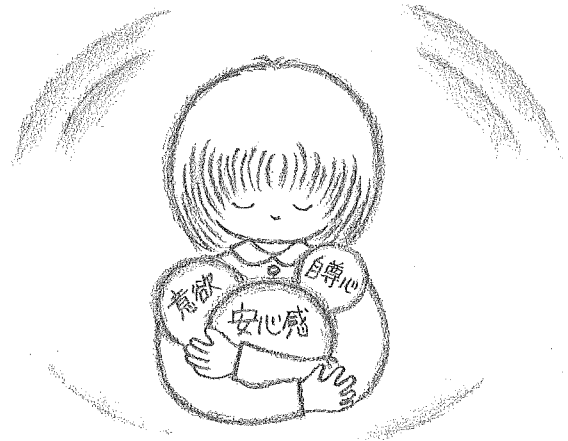
できるとともに、自分が自然でいられるような気がするのです。その方が持って生まれた資質なのか、あるいは長年のご経験によって培われたものなのかは分かりませんが、とにかく「歩くカウンセリングマインド」とでも呼びたいような方です。このような方に接すると、子どもの傷ついた心は癒され、健康な子どもであればより自分の持ち味を発揮できるのだらうと感じさせられます。つまり、その方のコミュニケーションそのもの、あるいは存在そのものが援助的なのです。私は、それこそが教育相談の本質なのではないかと考えています。

私がこのことに確信を持つようになったのは、吉本武史氏の『教師だからできる5分間カウンセリング』（学陽書房、2000年）に触れたことがきっかけです。吉本氏は、次のように述べています。

（教師の）皆さんはわざわざカウンセリング>的な心のケアをする必要はないのです。児童や生徒との間によりコミュニケーションを持ていただくこと、児童や生徒がそのことで、安心感がもて、かつ自尊心とともに意欲がもてるような、そんな援助的なコミュニケーションを築くことができる時、実は、それがそのままカウンセリング>がめざしている援助の目的そのものになっています。

吉本氏は、カウンセリングの本質は「援助的コミュニケーション」であると喝破されています。どんなに専門的なカウンセリングや心理療法の技法を駆使しても、援助者と被援助者との間でしっかりとした援助的コミュニケーションがない限り、それは功を奏することはないのだというのです。

私は、教育相談の本質も、まさにここに存するのではないかと考えています。そして、吉本氏も述べておられるように、子どもたちと日常をともにする教師は、まさに日常のさまざまな場面で援助的コミュニケーションを活かすことができるのです。



## 教師にとっての援助的コミュニケーション— 勇気づけ

では、カウンセリングや教育相談の本質ともいえる「援助的コミュニケーション」とはどのようなものなのでしょう。それに近い概念として以前から指摘されてきたのが、「カウンセリングマインド」です。一般には、「カウンセリングの神様」とも呼ばれるカール・ロジャーズが、カウンセリングにおいてクライアントに建設的な変化を引き起こすカウンセラーの態度とされる、「受容」「共感」「自己一致」がカウンセリングマインドの要素とされています。確かに、先述の「歩くカウンセリングマインド」氏は、まさにこの3要素を体現しておられるような方でした。

一方、私はそれに加えて、教師の援助的コミュニケーションとして、アドラー心理学で指摘される「勇気づけ」がそのヒントになるのではないかと考えています。勇気づけは、はっきりとした定義はないものの、アドラー心理学ではカウンセリングや教育においてクライアントや子どもと関わる際の最も重要な態度や姿勢であると考えられています。

私がアドラー心理学を教えていただいた岩井俊憲氏は、「勇気づけの技術」として、右の7点を挙げています（『勇気づけの心理学』金子書房、2002年）。

### ■勇気づけの技術■

- ①(減点主義ではなく)加点主義 100点満点からの減点法ではなく、0点からの加点法で考えます。
- ②(ダメ出しではなく)ヨイ出し その子のダメな点、劣った点、欠点よりも、良い点、優れた点、長所に目を向けます。
- ③(結果重視よりも)プロセス重視 結果の善し悪しによって評価するのではなく、そこに至るまでのプロセスに目を向けます。
- ④(競争原理よりも)協力原理 子どもたちを競い合わせて動機づけるのではなく、仲間との協力の楽しさや心地よさを教えます。
- ⑤(人格軽視ではなく)人格重視 アドラー心理学では、しばしば「行為と行為者とを分離しなさい」と教えます。悪いのはその人ではなく、その行為だと考えるのです。
- ⑥(聞き下手ではなく)聴き上手 カウンセリングの基本ともいえる傾聴そのものが勇気づけになります。「あの人がうなずくだけで出る勇気」という言葉もあります。
- ⑦(失敗を非難するのではなく)失敗の受容 人間は万能な神ではないのだから必ず失敗します。失敗を受け入れ、そこから何を学べるかを一緒に考える態度です。



近年、教育相談やカウンセリングにおいて、「リソース（資源、資質、力、持ち味）」という言葉が耳にすることが多くなりました。教育相談の姿勢として、「問題探しからリソース探しへ」などといわれます。特別支援教育とも関わりが深い学校心理学では、リソースをさらに「自助資源」「援助資源」とに分けて考えます。そして何より、リソースに焦点を当てるといふこの姿勢は、特別支援教育においても何ら変わることはありません。リソース探しは、勇気づけのもっとも重要な要素の一つだと考えます。

## 生徒指導・教育相談、特別支援教育、 そしてこれからの学校教育の目指すもの

これまで、特別支援教育と同様に従来からコミュニケーションを重視してきたのが教育相談であることを述べ、教師による「援助的コミュニケーション」の重要性を指摘してきました。それとともに、最近の特別支援教育と生徒指導・教育相談の双方が取り組んでいる課題が、子どものコミュニケーション力を高める取り組みです。現在の子どもたちに共通する課題として、「コミュニケーション力の低下」が指摘されているからです。

これに関しても、教育相談の分野では、先述のソーシャルスキル教育をはじめ、構成的グループエンカウンター、ピアサポート、アサーション、グループワークトレーニング、対人関係ゲームなど、特に集団を対象とするさまざまな取り組みが行われてきています。

ところで、子どもたちのコミュニケーション力を高める必要があるのはなぜなのでしょう。換言すれば、コミュニケーション力を高めて円滑な人間関係が築ければ、それでよいのでしょうか。私は、さらにその先に、生徒指導・教育相談の、特別支援教育の、そしてこれからの学校教育の目指すものが存在すると考えています。

それは、アドラー心理学が「共同体感覚」と呼んでいるものです。アドラー心理学では、カウンセリング、心理療法、そして教育の目標は、この共同体感覚を育てることであり、共同体感覚の有無が精神的健康のバロメーターであると考えています。また、さまざまな問題行動や精神病理は、この共同体感覚の欠如によって発生するとも述べています。

では、共同体感覚とはいったいどのようなものなのでしょう。勇気づけと同様、共同体感覚についてもはっきりとした定義はありません。しかし私は右上に示したような意識の総体ではないかと考えています。

読者の皆さんには、過去の学校生活で、「あのクラスは本当に仲間に恵まれて良いクラスだった。またあのクラスに戻りたいな」と思えるクラスはあったでしょうか。もしあったとしたら、そのクラスを思い浮かべてみてください。そのクラスには、①～⑤のような意識があふれていなかったでしょうか。そして、そのクラスは、活気に富み、まとまりが良いだけでなく、メンバーが生き生きとそれぞれの課題に取り組んでいたに違いありません。

また、このことは、皆さんが担任した（している）学級にも同じように当てはまるはずです。そのような学

### ■共同体感覚■

- ①他者や世界に関する関心 自分以外の他者や世界に関心を持っていることであり、その対極にあるのが「自分さえ良ければ」という意識です。
- ②所属感 自分は所属する共同体（アドラー心理学では理念的な存在であるとされているが、具体的には自分の所属する集団—たとえば学級集団—と考えれば良いであろう）の一員である、という意識です。
- ③貢献感 自分が所属する共同体のために、自分には貢献できること、役に立つことがある、という意識です。
- ④相互尊敬・相互信頼 一人ひとり違いはあっても、お互いにその良さを認め合い、お互いに尊敬の念を抱き、信頼しあえるような意識です。
- ⑤協力 お互いを敵と考え足を引っ張り合う競争の関係ではなく、お互いが協力の関係で結ばれているという意識です。

級を、「教育力のある学級」と呼ぶのです。

私は、我が国のこれまでの学校教育は、「共同体感覚」などという言葉は使わずとも、それに近いものを目指してきていたように思うのです。たとえば、先生たちはみな、子どもたちに「協力」の大切さを説いてきたではありませんか。我が国の学校教育は、基本的な方向性は間違っていなかったのです。

私は、そのような我が国の良き伝統が、「共同体感覚」という概念によって、より洗練された形で現代によみがえりつつあるように感じています。そして、その扉を開くのは、生徒指導・教育相談であり、特別支援教育なのです。

イラスト：小澤 光代

### ●会沢信彦（あいざわ のぶひこ）先生 プロフィール

文教大学教育学部准教授・教育専攻科長。1965年、茨城県生まれ。筑波大学大学院修士課程修了、立正大学大学院博士課程満期退学。函館大学専任講師を経て現職。日本教育カウンセリング学会常任理事。日本カウンセリング学会監事。日本生徒指導学会理事・関東支部会事務局長。日本学校心理士会埼玉支部事務局長。

共編著書に、『学級経営と授業で使えるカウンセリング』（ぎょうせい）2004年、『できる教師のマルテクニクシリーズ（全3巻）』（教育開発研究所）2008・2009年、『自分とも友達ともポジティブ・コミュニケーション』（ほんの森出版）2008年、訳書に、ジェーン・ネルセン他『クラス会議で子どもが変わる』（コスモス・ライブラリー）2000年、がある。

上級教育カウンセラー（日本教育カウンセラー協会）、学校カウンセラー（日本学校教育相談学会）、認定カウンセラー（日本カウンセリング学会）、学校心理士、臨床心理士。